

こんな夢を見た。

腕組をして 枕元まくらもとに坐すわっていると、仰向あおむきに寝た女が、静かな声でもう死にますという。女は長い髪を枕に敷いて、輪廓りんかくの柔らかな 瓜実顔うりざねがおをその中に横たえている。真白まっしろな頬ほおの底に温かい血の色が程ほどよく差して、唇の色は無論赤い。到底死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますと判然はつきりいった。自分も確たしかにこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗のぞき込むようにして聞いて見た。死にますとも、いいながら、女はぱちりと眼を開けた。大きな潤うるおいのある眼で、長い 睫まつげに包まれた中は、ただ一面に真黒であつた。その真黒な眸ひとみの奥に、自分の姿が鮮あざやかに浮かんでいる。

自分は透すき徹とおるほど深く見えるこの黒眼の色沢つやを眺めて、それでも死ぬのかと思つた。それで、ねんごろに枕の傍そばへ口を付けて、死ぬんじゃないかなろうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を眠そうに睜みはたまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわといった。

じゃ、私わたしの顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいつて、そら、そこに、写つてるじゃありませんかと、にこりと笑つて見せた。自分は黙つて、顔を枕から離れた。腕組をしながらか、どうしても死ぬのかなと思つた。

しばらくして、女がまたこういった。

「死んだら、埋うめて下さい。大きな真珠貝しんじゆがいで穴を掘つて。そうして天から落ちて来る星の破片かけを墓標はかじるしに置いて下さい。そうして墓の傍そばに待っていて下さい。また逢あいに来ますから」

自分は、何時いつ逢いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうして

また沈むでしょう。――赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、――あ
なた、待っていられますか」